

No.2901

ポスト・スハルト期インドネシアのイスラーム社会と大衆文化の変容をめぐる人類学的研究

東京大学
日本学術振興会特別研究員・PD
荒木 亮

ポスト・スハルト期と呼ばれる今日のインドネシアでは、都市部を中心に「さらなるイスラーム化」が伸展する一方、民主化や地方分権化の流れのなかで、地方社会や都市の周辺村落では、民族の慣習に根差した祭や儀礼の再興といった「伝統復興」がみられる。そこで、本研究は、インドネシアの村落社会における人類学的フィールドワークに基づき、かかる「イスラーム化」と「伝統復興」との併存状況について、大衆文化の変容という視点から明らかにすることを目的として、2年間（H29年度～H30年度）の研究活動を遂行した。

まず、1年目には、延べ6ヵ月にわたる都市近郊に位置する村落での現地調査を通じて、村落社会では、都市部を中心とした「さらなるイスラーム化」という現象が浸透してきているものの、（イスラームの教義とは、相反する行為をも含む）憑依儀礼の再興といった「伝統復興」が盛り上がりを見せている、ということ明らかにした。そのうえで、2年目には、1年目の調査で得たデータの整理と分析、文献研究、および、延べ1ヵ月にわたる都市と村落での現地調査を通じて、多角的に、なおかつ、より深く現地の実情について把握することを試みた。その結果、村人たちは、都市民と自己（村人）とを区別する謂わばアイデンティティ・ポリティクスとして、土着の憑依儀礼を再興することを試みているということ、ただし、その一方で、村人のあいだでも、儀礼の際に生じる憑依という現象をイスラームという視点から敵視する者が一定数存在する、という状況を描き出した。

以上のことから、本研究では、今日のインドネシア社会で人々（大衆）は、社会・個人双方のレベルで「さらなるイスラーム化」を経験しているものの、「伝統復興」と「イスラーム復興」という異なるベクトルの現象が同時並行的に展開している、ということ具体的な事例に基づき、明らかにした。